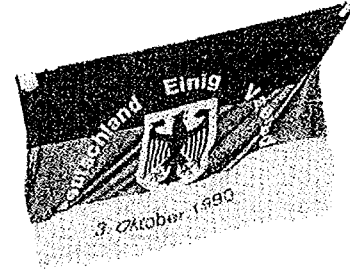


●不安と混乱●

ベルリン自由大学(以下FUという)で、平和研究の上でお世話になっているのがU・アルブレヒト教授の紛争(平和)研究所です。ここには各国の平和・軍事研究の資料からドイツ連邦軍の内部資料まで豊富に揃っています。海上自衛隊の掃海艇の湾岸派遣のニュースは、ここでも話題になりました。「鷹揚な憲法解釈」という見出しで報じた新聞もあります(Frankfurter Allgemeine Zeitung 25.4.91)。ドイツでも、NATO領域外への連邦軍の出動が基本法八七条a二項との関係で問題になっていることは前回少し触れましたが、「憲法解釈」でこうした重要な転換を行ったという点では共通しています。この点はまた別の機会にして、今回は統一後のドイツ社会の変貌と混乱についてお話ししましょう。

FUのグレースナー教授(DDRへ旧東独研究)は、統一後、古い州(旧西独)の生活にも大きな変化が起きているとし、「我々は現在、一つの国家の中に二つの社会を持っている」と指摘しています。そして、大量失業や社会問題の多発が東の人々の中に「DDRノスタルジー」を生むおそれがあり、旧東独地域のために「マーシャルプラン」のような大規模経済復興計画が必要だと強調しています(Berliner Zeitung 12.4.91)。「一つの民族、一つの国家」ということで統一まで一気に進んだドイツ。しかし、急速な統一の結果生まれた「二つの社会」。その結果、東出身者がオッシー(OSSII)と呼ばれ、「第二階級」として扱われるという問題も出ています。あえて西の

◎ベルリン発・緊急レポート②



# ドイツ統一から半年 一つの国家、二つの社会

水島朝穂 広島大学助教授

人々をウェッシー(WESSI)と呼んで、これを愛称にしよう動きもあります。

テレビのドラマやドキュメンタリーでもしばしばこの問題が取り上げられます。例えば、「マルクスとコココーラ」というドラマ。西の男性と東の農村女性との出会いから、愛を交らせるまでの錯綜を描いたもの。違った社会で生まれ育った世代の生活、習慣、心理等の微妙な違いや迷いがリアルに出ていました。東の子どもたちを取材したドキュメンタリーは、「僕らの国家は簡単になくなってしまった」というのがモチーフ。国家社会主義の画一的価値観で教育され、それが崩壊した今、子どもたちの気持ちの揺れは実に複雑です。戦後の「墨塗り教科書」で勉強した「焼け跡派」世代の日本人と同様の心象風景なのかもしれません。でも、今回は戦争の結果ではなく、忠誠の対象だった「私たちの国家」の自滅であり、同一民族の西ドイツへの編入です。その反応は実にさまざまです。私の東の知人には、旧体制下で批判的精神を持ちつづけてきた人が多く、公的行事が終わるたびに子どもに批判的家庭教育を行っていた人もいます。青年同盟の行事をさぼるあらゆる手段を工夫した人もいます。「党」と国家に対する市民の消極的抵抗の方法が実に創造的なのに驚きました。不安と混乱の中にあるのは、体制に忠実だった人々の子どもたちが多いようです。

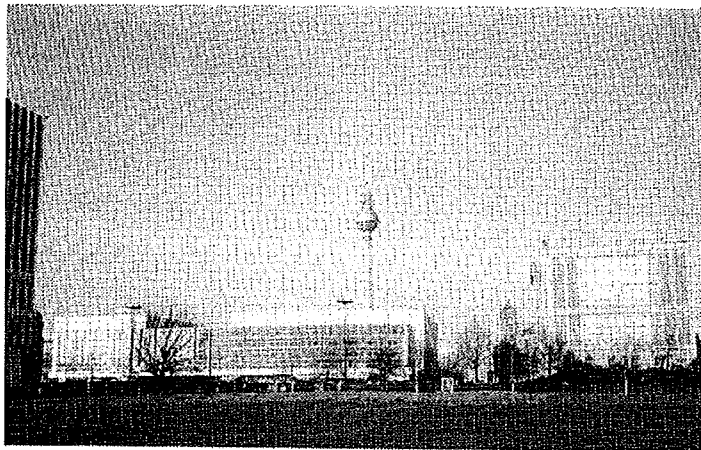
●「内なる壁」と犯罪の急増●

ベルリン郊外のマルツァーン地区。高層住宅が立ち並ぶ近郊都市。「トラビの街」といわれるだけに、住民の大半は都市勤労者です。その多くは

失業中。「にぎわっている」のは職安の前だけ。生活不安は家庭の崩壊を生み、この地区の少年犯罪の急増はマスコミでもしばしば取り上げられています。駅前から団地方面に向かう路上には、窓ガラスをすべて破壊されたトラビが何台も放置され、私のすぐ横を覆面姿の若者が嬌声をあげて駆け抜けていきます。「壁崩壊後、東西ベルリンの人々、とりわけ若者の間の『内なる壁』は日増しに高くなっていく」。これはFUの教育学専攻生が書いた「東の若者の状況」に関するレポートのモティーフです。社会的目標の喪失、「東」出身者というコンプレックス、家庭の荒廃等が原因で、東の若者の中に「攻撃衝動」が際立って多く見られ、その衝動は外国人（特に若者）や少数弱者に向けられている、と指摘しています。東の児童の校内暴力も深刻で、大人並みにナイフやヌンチャクを使った凶悪なものも少なくありません。

「一九九〇年犯罪統計」によれば、西ベルリンだけで検挙件数は合計一二万七〇〇〇件（前年比一九・五％増）。そのうち一四歳以下の少年が五四五〇件（前年比三六・四％増）といえます（Der Tagespiegel 9.4.91）。旧東独地域全体では、強盗及び恐喝が前年比で二一八％増、窃盗が五一・二％増という状況です。東のライプツィヒは「無政府状態」と報じられています（Die Welt 5.4.91）。警察官もシュタージ審査の対象となり、しかも絶対数が不足していることも背景にあります（警察労組は五万人不足を主張）。国家社会主義の崩壊は、著しい精神的荒廃を伴い、新種の社会問題を次々発生させています。

\*東独の国民車トラバントの愛称。一九五七年以来ほとんど変わらぬ車体と二気筒エンジン。排ガスの窒素酸



筆者の住居近く。左から旧外務省。旧「共和国宮殿」（旧人民議会）、「赤い市役所」、旧国家評議会。筆者の住居はテレビ塔前の高層住宅の11階。アレクサンダー広場はその斜め前。（1991年4月1日。筆者撮影）

化物はベンツの数倍という。ポティの内側はボール紙でよく燃える。ポツダム広場近くの炎上事故車を見て、大驚いた。これが今、アウトバーンを青白い煙を吹き出しながら走っている。七〇年代にモデルチェンジ計画もあったが、党政治局はこれを無視。党幹部はシトロエンやボルボ、悪くてもラダに乗っていた。だが、勤労者はトラビを買うのに何年も待たされた（ベルリンで八年、他では一三年から一五年！）。統一後は見向きもされず、四月三日で生産中止。この日、トラビの最終車（三〇九万六〇九九台目）は、工場からそのまま交通博物館行きとなった。この車は、東独国家社会主義の歴史的退歩と停滞の象徴といえる。私も、中古一台八〇マルク（七〇〇〇円）で買わないかと持ちかけられたが、自分の命と環境保護のために断った。

### ●大量失業と「月曜デモ」の混迷

旧東独地域の失業者は年末には一七〇万人に達すると予測されています。「短期労働者」（日本のパートタイムのような形態）二〇〇万人を加えると、東の就業人口の三分の一に達します（Die Welt 16.4.91）。これまで低くおさえられてきた各種料金の値上げも続々と始まります。東の家賃は一〇月一日から一斉に値上げされます（一般家賃、暖房費・温水費、維持管理費等すべて）。新聞の「相談コーナー」には、家賃が六倍になって破滅だといった市民の声も載っています。Sバーン（近郊電車）の運賃も、六月二日から一〇倍になり（東では最低運賃〇・二マルクと低額だった）、「運賃の統一」が実施されます。

三月二三日（土曜）の朝。アレクサンダー広場の信託公社ビル前で開かれた失業・料金値上げ反対集会。広場は人で埋まっています（主催者発表二万、警察発表六〇〇〇）。会場を歩きまわり、ビデオをとりましたが、目当ては、政治風刺を描いたプラカードです。八九年の「月曜デモ」では、人民をないがしろにした「人民民主主義」を皮肉る「私たちがその人民だ」（Wir sind das Volk）というスローガン「やがて「私たちが一つの人民（民族）だ」（Wir sind ein Volk）」になる」が有名になりました。今回は「旧政権党の後継政党」のPDSの動員組が多いようで、興味を引くものはありません。保守系の新聞が「多くの参加者が旧東独国旗を持っていた」（Welt am Sonntag 24.3.91）と書きましたが、私が見た限り、若者の一部が持っていた三本だけでした。前

の方は威勢がいいのですが、押し黙った人やポツと座っている年配の人々の姿も目立ちました。テレビニュースの遠距離から撮った画だけでは見えない部分です。集会で最も多く出た言葉は、信託公社 (Treuhandsanal) 清算 (Abwicklung) 皆伐 (Kahlschlag) 失業 (Arbeitslosigkeit)。信託公社が、国家破産した旧東独の企業や施設を破産管財人的に、あるいは旧国鉄「改革」時の清算事業団のように「残務処理」しており、それで職場が刈り取られ、失業が起きている、というわけです。TreuhandのHand(手)から、黒い手袋をした男(信託公社)が市民の首を締めつけている漫画のプラカードもありました。なお、四月一日に信託公社総裁D・ローベッター氏が暗殺され、事態は一層複雑になっています(次号参照)。

三月二十五日(月曜)。ライプツィツヒヤアレクサンダー広場で「月曜デモ」が行われました。マスコミも注目しました。しかし、八九年「市民革命」を象徴した「月曜デモ」も、今回は盛り上がり、途中から主力のドイツ労働総同盟(DGB)が撤退を表明。私が確認した最後の集会(Aレクサンダー広場・四月二日)は一〇〇人弱でした。四月一七日の金属労組IGメタル主催の失業反対集会(ポツダム広場)も、一五万の目標に対し、主催者発表で三万人。新聞の特派員の方と一緒に会場を見て回りましたが、実数は一万弱でしょう。大量失業や料金値上げ等は、総選挙中に社会民主党(SPD)のラ・フォンテーヌ首相候補が指摘していたことです。「選挙詐欺」「公約違反」というスローガンがありました。急速な統一を求めて、西では落ち目のコール政権を圧勝させたのは東の人々です。そのツケがこういう形で跳ね返ってきたわけです。八九年の「月曜デモ」



IGメタル労組の失業反対集会。左奥に見えるのがブランデンブルク門。(4月17日、筆者撮影)

を支持した西の人々が、九一年のそれに冷やかな反応を示すのも当然かもしれません。東の国家・社会システムの改革は、統一を選択した以上不可避でしょう。問題はそれが統一契約や基本法に則って行われるかです。連邦憲法裁判所は四月二四日、いわゆる「自宅待機」(Warteschleife)を定める統一契約の当該規定が基本法二二条(職業選択の自由)違反だとする東の市民の憲法訴訟を棄却しました(Frankfurter Rundschau 25.4.91)。職業選択の自由は、職場を用意する権利までも保障したものではありません。但し、清算される公的機関の職員を休職等にすることの措置が、母性保護や社会的弱者の立場を極端に不利にしないように一定の配慮も加えています。該当者は六〇万人にのぼり関心も高く、判決全文を別刷で出し

た新聞もありました(Neue Deutschland 29.4.91)。法変動期の現在、裁判所、特に憲法裁判所の役割は非常に大きいといえます(この間も重要判決が軒並み出ている)。

\*西でのコール政権の後退は進み、四月二日、首相の出身地ラインラント・プファルツの州議会選挙でSPDが大敗し、連邦参議院で少数派になりました。

### ●東の外国人問題、極右の台頭●

地下鉄アムルマー通り駅。ここで降りる乗客は実に国際色豊かです。近くに州住民局(外国人部)があるからです。私も滞在許可の手続をするために三度通いました。受付は殺到する外国人でパニック状態。私も三度目、小雪のちらつく中、朝六時半から並び、やっと番号札を手に入れました。七時前にはもう受付閉鎖。それから六時間待って、やっと手続が終わりました。最初の日、案内所に四〇分かけて並び、いわれたことは「朝早く来い」だけ。この日もそれをいわれるために、案内所に長い列ができています。ピザをとる際、神戸のドイツ総領事館の方が、「ベルリンはひどい。二月に雪の中を五時間待ったそうです。外ですよ」といわれたことを私も体験したわけです。外国人問題はドイツ統一の問題というより、西ドイツでも以前から深刻な問題でした。州統計局が発表した昨年六月末現在の数字(Der Tagespiegel/Berlin 16.3.91)によると、西ベルリン在住の外国人は約三〇万四七〇〇人(西の人口の一五%)。東ベルリンは約一六〇〇〇〇人。西の場合、トルコ人が一三万と群を抜いています。未登録者も含めれば相当な数になるでしょう。連邦政府の外国人問題担当官の報告書が三月二六日

# Großeinsatz gegen Neonazis

## Polizei konnte gewalttätige Ausschreitungen von Rechtsradikalen verhindern

Von unserem Redaktionsmitglied Anja Hill

Aus Anlaß des 102. Geburtstages von Adolf Hitler kam es am Sonntagabend in mehreren Städten zu gewalttätigen Aktionen von Rechtsradikalen. Die befruchteten großen Ausschreitungen blieben jedoch aus. In Oberweser bei Kassel hatten Neonazis parkende Autos mit Baseballschlägern demoliert. In der ostniederrheinischen Innenstadt überfielen randalierende Radikale eine Gruppe von Kurden, die sich im Hungerstreik befanden, und steckte ihr Zelt in Brand. Zu Zwischenfällen kam es auch in Berlin, Dresden, Magdeburg, Dessau und Cottbus.

Wie warden der Geburtstag Hitlers mit Feiern und Paraden gefeiert, hatte der 20-jährige Oliver aus Frankfurt am Main angekündigt und nicht falsch gesagt. Zusammen mit seinen rechtsradikalen Freunden aus Jena und Herdrath trat er sich am Sonntagabend mit an. Am 102. Geburtstag des „Führers“ hatten sich rund 200 Neonazis versammelt, in diesem Cottbus zu stiften und die geschickte antifaschistische Demonstration der



Rechtsradikale in Dresden: Jeder der Naziparolen rief, wurde verhaftet (fastgenommen). Foto: dpa

Linken und Autonomie zu zeigen. Doch gar nichts. Schon im Bahnhofs wurden sie von zwei Hundertschaften des Bundesgrenzschutzes aus Bayern und der Dresdener Polizei abgefangen. In der schmalen Straße am Fürstentum eingekesselt und dort festgehalten, bis die Demonstration der Linken vorbei war. Zu den befruchteten Ausschreitungen zwischen beiden Gruppen kam es nicht. Wer Naziparolen rief, wurde von der Polizei sofort in Gewahrsam genommen. Zu mindest diesmal hatte die Polizei alles test im Griff.

Der Tag in Dresden endete mit 93 vorläufigen Festnahmen darunter 18 Berliner aus der linken Front einer Schlägerei mit drei Verletzten und der Durchsuchung eines besetzten Hauses der linken Autonomen. Dort wurden neben Sewerkerpistolen, auch 85 Mosowewerkzeuge gefunden.

Für Ausschreitungen Rechtsradikaler ist Dresden mittlerweile schon bekannt. Das Spiel gegen Roten Stern Heide am 30. März mußte wegen Gewalttaten frühzeitig abgebrochen werden, und am Ostermontag stand ein Mordanschlag auf Neonazis aus einer Straßenge-

hauht gestochen werden war. Gegen genug. Journalisten aus Österreich, Frankreich, Mexiko, Argentinien, Holland und sogar Japan in die Elbe-Stadt zu kommen. Die Holänder kamen in erster Linie, um festzustellen, ob die Stadt Dresden nicht für den geplanten Besuch von Königin Beatrix am 26. April zu gefährlich sei. „Wir leben hier zwar nicht täglich in Angst und Schrecken, aber eine gewisse Furcht ist vorhanden“, gibt Polizeisprecherin Uwe Bruchmann zu. Im Neubauviertel, wo es ständig Auseinandersetzungen zwischen Autonomen und Rechtsradikalen gibt, haben sich manche Bürger nach 20 Uhr nicht mehr auf die Straße. Rund 10 „harte Skinns“ sind der Dresdener Polizei bekannt. Trotz des erheblichen Einsatzes am Sonntagabend wachsen die Probleme in Dresden. Keiner der Polizisten hat bisher einen Anzeigungsvertrag mit der Polizei abgeschlossen. Die lange verschobene Ausrüstung ist noch nicht angekommen, was was vor allem fehlt ist ein Polizeigesetz, das dem Land verabschiedet werden soll. Um sich über ihre Rechte zu informieren, müssen die Polizisten selbst im Straßengesetzbuch blättern.



Auch der Bundesgrenzschutz in Magdeburg hatte Sonder Einsatz. Foto: ZD

ヒトラー誕生日に行進するネオ・ナチス (ドレスデン) を報じる Berliner Zeitung 22.4.91

「旧東独時代に国家により命令された連帯が、公然たる外国人敵視に転化した」(Berliner Zeitung 8.5.91)とされる所以です。

「日常生活の一部となった」といわれています (Sachsen Spiegel 19.4.91)。ポーランド人の旅行が自由化 (ビザなし) された四月八日、ポーランド人観光客に対し、極右スキンヘッドが「ジーク・ハイル」(ナチス式敬礼) を叫びながら暴力をふるいました。彼らの多くは一三歳から一九歳までの東の青少年で、二年前までピオニールや青年同盟でたっぷり仕込まれた世代です。「指導者への忠誠と服従」という心性では、二つの国家社会主義には共通性があるのでしょうか。東の外国人排撃がかくも過激になる背景には、社会や生活の混乱だけでなく、旧体制の「上からの反ファシズム」(ジョルダノフ「第二の罪」) や「国際主義」(「ソ連との友好」) が、ナチズムの克服と真の国際化を妨げ、一般の人々 (特に若者) の意識レベルに「外国人敵視」(Ausländerfeindlichkeit) を保存・醸成してきたことがあるのかもしれない。「旧東独時代に国家により命令された連帯が、公然たる外国人敵視に転化した」(Berliner Zeitung 8.5.91)とされる所以です。

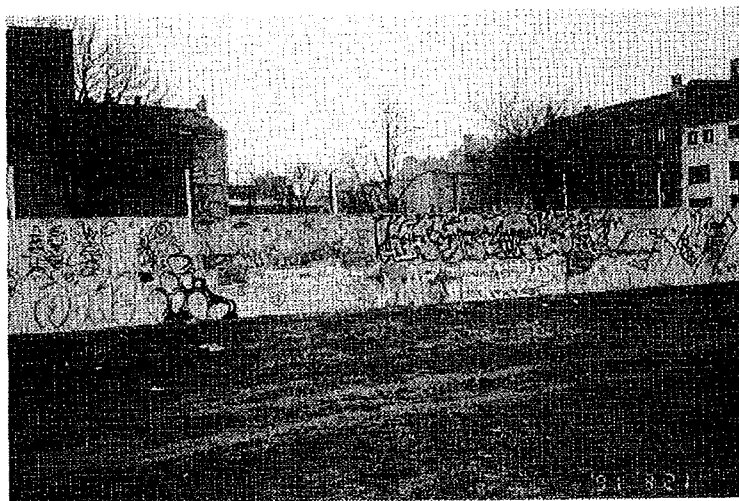
に出ましたが、これを報ずる新聞の見出しに「連邦共和国は移民の国」というのがありました (Frankfurter Rundschau 27.3.91)。  
東の場合、外国人問題はまた特別です。東には旧体制下で「客員労働者」(ガスタルバイター)としてやってきたベトナムとモザンビークの人々が住み着いています。彼らは今、東の心ない人々の「いじめ」の対象になっています。自分たちが失業等の生活不安にあるのに、「何で外国人が」という気持ち強いのでしょうか。私自身も、西ドイツではかつて感じたことのないプレッシャーを随所で感じます。先日近所に買い物に出た時、私

のすぐ前を歩いていたベトナム人青年が、ドイツの若者数人にいきなり足払いをかけられました。次は私かと身構えましたが、なぜか私を無視して立ち去りました。近くの地下通路にはベトナム人がダンボールを並べて煙草を売っていましたが、四月二六日に状況は一変。通路の両側にぎっしり立っているのはすべてドイツ人失業者です。身りのきちんとした中年男女が煙草や葉巻の箱を手に立ち、通行人をジロツと眺めている光景は何ともいえません。ベトナム人はマルクス・エンゲルス広場駅の方に移動していました。ベトナム人は統一後その大半が失業。今も二〇〇〇人(往時は

七〇〇〇人) が東ベルリン・マルツァーン地区 E・グリニツクアウフ通り周辺等に居住しています。四月六日、ここをスキンヘッドと呼ばれるネオ・ナチグループ(この日は一五人) が焼き討ちしました。S バーン車内での外国人に対する暴行事件も多発しています。三月三十一日、ドレスデン市内でモザンビークの青年(二八歳) がスキンヘッド数人の暴行を受け死亡しました。旧東独地域の人種主義の特徴として、アフリカの黒人青年に対する襲撃の多発が挙げられます。「夜六時すぎたら、S バーンに乗るな」が黒人たちの「不文律」になっているそうです (Die Tageszeitung Jost)。旧東独地域では、外国人に対する暴力は「日常生活の一部となった」といわれています (Sachsen Spiegel 19.4.91)。ポーランド人の旅行が自由化 (ビザなし) された四月八日、ポーランド人観光客に対し、極右スキンヘッドが「ジーク・ハイル」(ナチス式敬礼) を叫びながら暴力をふるいました。彼らの多くは一三歳から一九歳までの東の青少年で、二年前までピオニールや青年同盟でたっぷり仕込まれた世代です。「指導者への忠誠と服従」という心性では、二つの国家社会主義には共通性があるのでしょうか。東の外国人排撃がかくも過激になる背景には、社会や生活の混乱だけでなく、旧体制の「上からの反ファシズム」(ジョルダノフ「第二の罪」) や「国際主義」(「ソ連との友好」) が、ナチズムの克服と真の国際化を妨げ、一般の人々 (特に若者) の意識レベルに「外国人敵視」(Ausländerfeindlichkeit) を保存・醸成してきたことがあるのかもしれない。「旧東独時代に国家により命令された連帯が、公然たる外国人敵視に転化した」(Berliner Zeitung 8.5.91)とされる所以です。

## ●電話の「ベルリンの壁」●

話は突然変わり、東の電話事情について一言。こればかりは私も当事者になりました。私の部屋の電話は外からはかかるのですが、こちらからかけるのが一苦労。そうと知りつつ東に住んだものの、想像以上でした。東ベルリンやソ連、他のヨーロッパ諸国へはダイヤル直通でかかりますが、日本へはダメ。国際電話局のようなところに申し込む。番号は〇一一三。これが絶望的につながらない。近所の一流ホテルまで行って日本への電話を申し込んだら、「一時間ほど待つので、西ベルリンに行っておかけ下さい」といわれ、急いで地下鉄に乗り、「壁」(実際にはもうない)の向こうにあたる西ベルリンの駅まで行って電話をしたこともありました。ある時冗談に回してみたら、突然電話交換が出てしまい、申し込んだのはいいけれど、日本はその時夜中の一時だった、ということも。回線が圧倒的に不足しているからで、「東ドイツの長距離通話非常事態」(Die Taz 15.3.91)とされる所以です。同じベルリン市内でも西にかけるのがまた大変です。八四九を回してから西ベルリンの局番を回すのですが、途中でピーピーといいたす。この四月から、西ベルリンから東ベルリンにかける時に従来〇三七二を回していたのが九だけできなくなり、多少便利になりました。でも東から西には相変わらず八四九を回さねばならず、しかも減多につながらない。東に事務所を置く企業やマスコミは必ず西の電話を入れていきます。そうでないと仕事にならないからです。この間、東に住む私も、西の電話やFAXを使える状況を何とか作り出し、不便をしのいでいます。今



悲劇の場所—ベルナウアー通りの壁(1991年4月4日。筆者撮影)

の状況が改善されるのは早くも九二年末とのこと(Berliner Zeitung 26.3.91)。電話事情が全体として西並みになるのは、九七年末といわれています(Der Tagesspiegel 19.3.91)。ベルリンの壁はなくなくなったが、電話における「壁」は厳然として存在しています。なお、今年はずでに五〇万の電話加入申込みが旧東独地域でありました。東でも「一家に一台の電話」の時代が来たわけです。

## ●「壁」の断片からガスマスクまで●

最後におまけを一つ。ブランデンブルク門付近

を中心に、旧国家人民軍(NVA)の鉄帽や制服から、軍人手帳、拳銃ホルスター、銃剣、階級章、ガスマスクまで売られています。最近では区当局の規制にあつてやや下火ですが、それはすごい光景です。ある日の夕方、将校の儀式用短剣を抜いて見ていると、八五〇マルク(約七万五〇〇〇円)で本物の軍用拳銃を買わないかと声を掛けられました。相手の目が真剣なので、ちょっとヒヤッとなりました。事情に詳しい友人に聞いたところ、「冗談ではない」そうです。東ではかつての銃火器携帯許可証が法的にまだ有効で、「武装したシユタージがまだ厳然として生きている」と書く大衆紙もあります(Berliner Kurier 4.4.91)。かの「ベルリンの壁」も置物やペンタントに売られて売られています。商魂逞しきは日本人顔負けです。置物は二〇マルクから一五マルク。旧東独の硬貨や切手とセットにしたものもあります。売り子はオリジナルだといいますが、どこまで本当か分かりません。旧チェックポイント・チャーリー検問所の付近に工房があり、値段もそこで調整しているようです。そこでは、工事現場のコンクリに色を塗って削っていた。「ベルリンのぬりかべ」とか(笑)。これは冗談。そのうち、「ベルリンの壁鑑定家」が現れ、単なる工事現場のコンクリートの固まりと本物との違いを説くかもしれませんね。

次回は旧東独の「過去」に関わる問題を中心に報告します。

一九九一年五月一〇日記  
(みずしま・あさほ)